

---

# 自動販売機

さとう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

自動販売機

### 【著者名】

さとう  
ひづみ

N6306D

### 【あらすじ】

ある日、少年は変な自動販売機に出会ってしまいました。彼の運命は？

「ちょっとのど渴いたな。ジュース買つか  
健一は、自販機へ向かつた。

そして、

「何にしようかな……よし！ オレンジジュースだ！」  
と飲みたい物を決めるお金を入れた。

「チャリン！」

すると、自販機は、

「いらっしゃいませ」

と軽くあいさつした。

さっそくボタンを押す。

「ポチッ！」

しかし、ジュースが出てこない。

「どうしたのかな？ 故障かな？」

健一は、自販機を軽く叩いた。

「ゴンゴン！」

すると自販機は、

「いらっしゃいませ」

と言つた。

健一は、

「壊れるな……」

と思つた。

そして、もう一度ボタンを押した。

「ポチッ！」

しかし、何も出でこない。

「いらっしゃいませ」

自販機は、また冷静に言つた。

完全に故障だ。

健一は、

「あこせつせ、 むついいからお金返せ」と言つて、お釣りの返却レバーを動かした。

「グイッ…」

しかし、お金は出でこない。

「こりつしゃいませ」

自販機は冷静だ。

健一は、どんどん腹が立つってきた。

「こりつしゃこませ」

「お前ひれこぞ」

「こりつしゃこませ」

「それしか言えないのか?」

「こりつしゃこませ」

「こりつこな」

「単純な野郎だ」

「それより金返せ!..」

「それはやだ」

「えつ…」

健一は、一瞬止まった。

「…お前…今、『それはやだ』って言つたよな?」  
「…あむと自販機は、少し間をおこして、

「こりつしゃこませ」

と言つた。

健一は、

「今言つたよな?」

と自販機にさいた。

「こりひしゃこませ」

「こりひしゃこませ」

「今言つたよな？」

「今言つたよな？」

「今言つたよな？」

「今言つたよな？」

「それはやだ」

「一。」

健一は、思わず止まつた。  
この自販機やつぱり変だ。

「今言つたよな？ 確かにはつかり『それはやだ』つて言つたよな  
？」

すると自販機は、少し間をおいて、

「こりひしゃこませ」

と言つた。

健一は、

「よーし、お前の考えはよくわかつた」と言つて近くにあつた棒を拾つた。

そして軽く、

「ガン！」

と自販機を叩いて、

「おー！ 次は本氣でいくからなー！」

と言つた。

すると自販機は、すぐに、

「ガタン！  
ゴト！」

と胸呂を出しました。そして、

「ありがとうじゃねござった」

無一が

「やつとわかったようだな。最初から素直になりやいいんだよ」

と詰つて矢を取り出した。

ପ୍ରକାଶକ

と書いてあつた。

健一は、一瞬で切れた！

リスが  
自販機は、

「ありがとうございます」

と冷静に言った。

健一は

と大声を出した。

そして、おじいさんの缶を見つめた……

「不味そうだな。これ

不思議

そして、仕方なくおしゃる「」を一口だけ飲んでみた。

「あ、どう？」

あれ、

思つたよつ、おこしかつたよつである。

健一は、こいつのまにか、おしるいを全部飲んでしまった。

すると自販機は、

「おすすめです」

と言つた。

健一は、

「お前、なかなかセンスあるな。いいな、おしるい」と言つて自販機を見直した。

自販機は、

「ありがとうござります」

と言つた。

健一は、

「もう一つ欲しいな」と言つてお金を入れた。

そして、おしるいのボタンを押した。

「…………出でこない…………」

健一は、またまたブチッと切れた！！

「この野郎！！ 下手に出ればいい気になつやがつて！！ 壊してやる……」

すると、自販機は、

「ガタン！」「トー！」

と素直に商品を出して、

「ありがとうござりました」

と言つた。

この自販機、完全になめてる。

健一は、

「まあいいか…わかりやいいんだよ、わかりや…」

と言つて、缶を取り出した。

すると缶には、

「やきとり」

と書いてあつた。

健一は、一瞬で切れた！！

「いい加減にしろ！！ この野郎！！

しかもこれ、 固形物じゃね

ーか！！

健一は、叫んだ！

すると急にお腹が、

「グー！！」

と鳴った。

健一は、

「…………そういえばちょっとお腹減ったな……」

と思つた。

そして、

「ちょっと食べてみるか……」

と言つて缶を開けて食べてみた。

「…………おいしい…………」

健一は、複雑な気分になつた。  
すると自販機は、

「毒入りです」

と言つた。

健一は、その瞬間、

「ブー！！！」

と吐いた。

自販機は、

「完全に毒入りです」

と言つた。

健一は、

「なつ何だつて！ 毒入り！！ お前ふざけてんのか！！！」

「お前ふざけてんのか！！！」

と激怒した。そして、今食べたやきとりを必死に吐いり出した。

すると、自販機は、「つそです」

と言った。健一は、「ハア！ ハア！ ハア！ 驚かせやがって…… 完全に頭にきた…… 貴様、ぶつ壊す……！」

と言った。

すると自販機は素早く、

「私を壊すと解毒剤を飲むことができなくなりますよ」

と言った。健一は、

「えっ！ 解毒剤……？」

と一瞬動きが止まった。そして、

「解毒剤といふことは……」

と訊くと自販機は、

「そうです。毒入りです」

と言った。

健一は、

「オエー！！」の野郎なめてんのかー 早く解毒剤を出せ……！」

と激怒した。

すると自販機は、

「それでは、私の出題するクイズに答えられたら解毒剤を差し上げます」

と言った。

健一は、

「ほつ！ 本當だな！」

と自販機をにらんだ。

自販機は、

「では問題です。今ここに普通のやきとりなのに毒入りのやきとりを食べたと思い込んでいる人がいます。それは誰でしょうか？」

と言った。

健一は、

「…………もしかして俺?」  
と、ゆづくつ言つた。

すると自販機は、

「そうです!」 正解―――――― あなたで――――――か――」  
と叫んだ。

健一は、

「わーい! やつた―――――― バンザイ―――――― つて書がふ  
けないだろ!! 完全に切れた! ぶつ壊す――」  
と言つて棒をつかんだ!

すると自販機は、

「怒らないで、怒らないで! 上に書いてある字を読んで下をこ」  
と言つて、健一を落ち着かせた。

健一は、自販機の上に手をやつた  
すると、じつ書いてあつた。

「自動おひくつ機

(おしまこ)

(後書き)

たまに来てね！

http://www.muroi1.com/sakmok.h  
tm1

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6306d/>

---

自動販売機

2010年10月15日23時53分発行